

むかし、糸魚川に、貧しい刀鍛冶がありました。鍛冶屋は、働き者でしたが、もうだ
いぶ年をとっていました。妻は亡くなっていて、たいそう美しいひとり娘がありました。

鍛冶屋は、娘をたいへんかわいがっていました。

鍛冶屋は、つねづね、こういっていました。

「娘の夫になる人は、宵から明けがた一番鶏の鳴くまでに、刀を千本作る腕のある者で
なくてはならん」

これまで、たくさんの方が、美しい娘を手に入れようと、やって来ました。けれど
も、だれひとりとして、宵から明けがたの一番鶏の鳴くまでに、千本の刀を作る者は
いませんでした。

ある秋の暮れ、ひとりの侍が、鍛冶屋の家にやって来ました。侍は、白い顔に目鼻立
ちのくつきりした美しい若者でした。鍛冶屋が侍を家に入れると、侍は、すぐに仕事場
に入って行っていました。

「では、一番鶏の鳴くまでに、千本の刀を作って見せましょう。けれども、どうぞ、あ
したの朝まで、ここをのぞかないでください」

鍛冶屋は承知しました。

鍛冶屋が奥の部屋で寝ていると、仕事場の方から、トッテンカン、トッテンカンと、
刀を打つ音が聞こえて来ました。夜が更けるにつれて、その音はさえわたって、鍛冶屋
はいっこうに眠れませんでした。

「どうして、働いているところをのぞかないでくれといったのだろう」

鍛冶屋は気になって仕方になりました。そこで、むっくり起きあがって、しのび
足で仕事場に行きました。板戸のすきまからのぞいて見ると、大きなへびと小さなへび
が刀を打っていました。

鍛冶屋は、おどろいて部屋にもどり、どうすればよいだろうと考えました。かわいい
娘をへびと結婚させるわけにはいきません。

考えに考えた末、鍛冶屋は裏のにわとり小屋に行つて、にわとりがとまっている竹ざ
おの中に煮たつたお湯を注ぎました。にわとりは、足が熱くなつたのでびっくりして目
を覚ましました。そして、朝が来たのだと思って、コケコッコーと鳴きました。

そのとき、へびは、刀をちようど九百九十九本作ったところでした。にわとりの鳴く声を聞くと、へびは、あと一本を残して、どこへともなく消えてしまったということですよ。

おしまい

村上郁再話

資料『伝説の越後と佐渡』中野城水／文章院出版部